

令和 5 年 5 月 9 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00988

研究課題名（和文）近現代インドのユダヤ教徒のライフ・ヒストリーと「国民国家」

研究課題名（英文）The Jews in modern India: Their life histories and the ideas of a 'nation-state'

研究代表者

井坂 理穂 (Isaka, Riho)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：70272490

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近現代インドにおいてユダヤ・コミュニティが、イギリス植民地支配の確立、ナショナリズムの台頭、欧米におけるシオニズムの影響、2つの世界大戦、インド・パキスタンの分離独立、イスラエルの建国宣言などの大きな政治変動のなかで、自らの帰属意識をどのように模索したのかを検討した。ここではとりわけ、インド西部に在住するベネ・イスラエルと呼ばれるコミュニティに焦点を当て、このコミュニティに属する人々のライフ・ヒストリーの事例をもとに、彼らが自らのユダヤとしてのアイデンティティをいかに語り、自らとインド、イスラエルという国民国家との関係をどのようなかたちで規定していったのかを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はインド社会におけるいわゆる「宗教的マイノリティ」であるユダヤの視点から、インドという国民国家の形成過程を追うことで、インド近現代史に新たな視点を導入するものである。また、邦文において研究蓄積がきわめて限られていたインド西部のベネ・イスラエルについて、彼ら自身の帰属意識や彼らを取り囲む環境の変化を通時的に明らかにした点でも意義をもつ。さらに彼らとシオニズムとの関係やイスラエルへの移住の流れを分析することで、インド国内外におけるユダヤをめぐる状況の連関を示し、インドのユダヤ・コミュニティに関する研究を他地域のユダヤ研究、あるいは地域横断的なユダヤ研究と接続させることを試みた。

研究成果の概要（英文）：This research examines how the Jewish communities in modern India explored their sense of belonging amidst significant political changes such as the establishment of British colonial rule, the rise of Indian nationalism, the influence of Zionism in the West, the two world wars, the Partition, and the declaration of the establishment of the state of Israel. It focuses on the case of the Bene Israel community in western India. Based on case studies of individuals from this community, the research demonstrates how they asserted their identity as Jews and defined their relationships with India and Israel.

研究分野：南アジア近代史

キーワード：インド ユダヤ 近現代 国民国家 移動 帰属 ライフ・ヒストリー マイノリティ

1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで、主に近現代のインド西部における知識人たちの活動に焦点を当て、彼らの国家や地域への帰属意識のあり方を検討してきた。その過程で同地に在住するいわゆる「宗教的マイノリティ」、とりわけ人口規模の小さいパールシーやユダヤ出身の人々の言説に関心を抱いた。この関心がもととなり、インド西部のベネ・イスラエルと呼ばれるユダヤ・コミュニティが、19世紀から20世紀前半にかけてのインド政治・社会変動をどのように経験し、いかなるかたちでそれらを理解したのかを探ろうとしたのが、本プロジェクトの出発点である。さらに、近年のインドにおけるヒンドゥー・ナショナリズムの台頭や、グローバル化の進展は、宗教的マイノリティに属する人々の自己/他者認識や、インド社会における彼らの位置づけに大きな影響を与えている。こうした現状を把握するうえでも、彼らの帰属意識や国家観を通時的に追うことが有効であると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近現代インドにおいてユダヤ・コミュニティが、イギリス植民地支配の確立、ナショナリズムの台頭、欧米におけるシオニズムの影響、2つの世界大戦、インド・パキスタンの分離独立、イスラエルの建国宣言などの大きな政治変動のなかで、自らの帰属意識をどのように模索したのかを検討することにある。ここではとりわけ、インド西部に在住するベネ・イスラエルと呼ばれるコミュニティに焦点を当て、同コミュニティに属する人々のライフ・ヒストリーの事例をもとに、彼らがこれらの政治変動をいかに経験し、そのなかで自らの歴史やユダヤとしてのアイデンティティをいかに語り、自らとインド、イスラエルという国民国家との関係をどのようなかたちで規定していったのかを考察した。

3. 研究の方法

本研究は上述のような問題意識のもとに、文献収集と聞き取り調査を通じて、植民地期から1950年代にかけてのベネ・イスラエルの人々のライフ・ヒストリーの事例を集め、同時代のインド国内外の状況と関連させながら分析するかたちをとった。文献収集と聞き取り調査においては、英語、グジャラーティー語、マラーティー語の3言語が用いられた。初年度にあたる2018年には、研究代表者、研究協力者がインド西部のムンバイ、プネー、アリバークなどで調査を行い、ユダヤ関連施設を訪問し、さらにベネ・イスラエルに属する個人や家族を対象とした聞き取り調査を行った。ベネ・イスラエルの多くが、1950年代以降、イスラエルに移住していることから、2019年には研究代表者、研究協力者はイスラエルにおいて、ベネ・イスラエル出身者を対象とした聞き取り調査やイスラエルにおける彼らの社会状況に関する資料収集を行った。研究代表者はさらにイギリスのブリティッシュ・ライブラリーその他で、植民地期やインド独立後にベネ・イスラエル知識人たちの刊行した諸文献や、インドを訪れた欧米のシオニストたちの残した文献をもとに、ベネ・イスラエル知識人の諸活動や、彼らと欧米のシオニストたちとの交流、彼ら自身の語る「自分たち」の歴史に関する叙述などを収集・分析した。さらにベネ・イスラエル知識人たちの回顧録、自叙伝、文学作品、書簡、インタビュー記録などの収集・分析も行った。また研究代表者は、インド西部のアフマダーバードにおいてもベネ・イスラエルの個人や家族への聞き取り調査を行った。ベネ・イスラエルに属する人々の経験や記憶を記録する試みは、ベネ・イスラエル・コミュニティ内部において近年活発化しており、インドやイスラエルでの調査時には、それらのプロジェクトに関わっている人々とも情報・意見交換を行った。また、本プロジェクトが中心となって、ワークショップやセミナーを企画し、それらを通じて様々な地域のユダヤ・コミュニティを扱う研究者たちとの学術交流も進めた。2019年3月には、インドのユダヤ・コミュニティについて精力的に研究を展開しているYulia Egorova氏(Durham University)を日本に招聘し、国際ワークショップ及びセミナーを開催したが、それらには南アジア研究者はもとより、南アジア以外の地域を扱う研究者も参加し、ユダヤとは何かという大きな問いも含め、参加者の間で様々な角度から活発な議論が交わされた。

4. 研究成果

本研究の成果としては、主に以下の5点が挙げられる。(1)インドに在住するユダヤ・コミュニティの全体像の把握、(2)ベネ・イスラエルの歴史や現状についての把握、(3)ベネ・イスラエルとシオニズムの関わりについての分析、(4)ベネ・イスラエルの視点から見たインド、イスラエルという「国民国家」成立過程の再検討、(5)ベネ・イスラエル作家の文学作品にあらわれる「故郷」をめぐる言説の分析。以下ではこれらのそれぞれについて、何をどこまで明らかにしたのかを説明する。

(1) インドのユダヤ・コミュニティの概要

インドのユダヤ・コミュニティは、2011年センサスの時点でその人口が5000人を下回るとい

う小規模のコミュニティとなっている。イギリス植民地期には2万人を超える人口を有していたが、1950年代以降にイスラエルへの大規模な移住が起こり、インド国内での人口は減少した。インドのユダヤに関する研究は、英語では多数の研究が刊行されているが、邦文では断片的な記述にとどまっている。本プロジェクトでは、まずインドに在住する複数のユダヤ・コミュニティのそれぞれについて、先行研究や一次資料を用いながら、その歴史や現状を日本語でわかりやすくまとめる作業を行った。具体的には、「植民地期インドのユダヤ・コミュニティとシオニズム」(『ODYSSEUS 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要』第26号、2021年。若干の修正箇所があり、インターネット上では論文とともに正誤表を掲載)の冒頭で、インドにおける複数のユダヤ・コミュニティについて紹介したほか、日本でユダヤ研究に携わる研究者たちが現在編纂している事典のなかで、インドのユダヤに関する情報をまとめている。これらの記述では、本プロジェクトで焦点を当てたインド西部のベネ・イスラエルのほかに、18世紀以降にインドにイラク、シリア、イランその他から移住し、ボンベイやカルカッタなどの都市部に居住したバグダーディー・ユダヤ、古代にインドに到来したとされるインド南西部のコーチン・ユダヤ、インド北東部で1950年代からユダヤとしての意識を表すようになったブネイ・メナシュ、インド南部のアーンドラ・プラデーシュ州で1980年代以降にユダヤの出自を主張するようになったブネイ・エフライム、さらにヨーロッパから移住したユダヤなどに言及している。

(2) ベネ・イスラエルの歴史と現状

上記の作業とあわせて、邦文文献における記述がきわめて限られているインド西部のベネ・イスラエル・コミュニティについて、先行研究や一次資料をもとに、その歴史や現在の状況をまとめた。ベネ・イスラエルは、彼らの間でよく語られる伝承によれば、その祖先は古代イスラエルの「失われた10部族」に属し、紀元前にインド西部に漂着し、この地に定着したとされる。その過程でヘブライ語を忘れ、現地の言語や諸習慣を取り入れ、ユダヤの教義や祈りの言葉の数を多く忘却したとされているが、あるとき外部からこの地方にやってきたディヴィッド・ラハビという人物によって、彼らがユダヤであることが「発見」され、ユダヤとしての意識・伝統を取り戻したと伝えられている。イギリス植民地期には、ベネ・イスラエルのなかから、軍隊に加わったり、英語を習得して官僚職・専門職に就くなどして、経済的・社会的地位を上昇させる人々が現れる。その後、印パ分離独立、イスラエル建国宣言を経て、イスラエルへの移住の波が始まる。こうしたベネ・イスラエルの歴史を踏まえて、本プロジェクトでは研究対象とする時代を近現代に絞り、ベネ・イスラエル知識人たちの帰属意識や国家観を、19世紀後半～第一次世界大戦、1917年バルフォア宣言～戦間期、第二次世界大戦～印パ分離独立・イスラエル建国宣言、イスラエル建国宣言以降、という4つの時代区分に分けて検討した。

(3) ベネ・イスラエルとシオニズム

上記の4つの時代区分のうち、今回のプロジェクトで中心となったのは、との部分であった。この時代区分、すなわち1917年バルフォア宣言から戦間期にかけてのベネ・イスラエルの帰属意識や国家観については、日本南アジア学会全国大会(2020年)、AAS-in-Asia(2019年)で報告を行ったほか(学会発表リストを参照)、「植民地期インドのユダヤ・コミュニティとシオニズム」と題する論文(前述)の後半部で考察している。ここでは戦間期におけるベネ・イスラエルとシオニズムとの関わりについて、同時代におけるインドの国内情勢の変化にも留意しながら検討した。バルフォア宣言が出された直後は、ベネ・イスラエル・エリートたちは、パレスチナのナショナル・ホーム建設の構想を歓迎しつつも、やや距離をおく姿勢をみせたのだが、1920年代以降はその姿勢を徐々に変化させていく。その背景には、インド・ナショナリズムの台頭やイギリスからインドへの部分的な権力移譲のなかで、彼らが「とりわけ小さなマイノリティ」としての自らの立ち位置について改めて検討する必要に迫られたことがある。また、この時期にはパレスチナ建設への資金協力などを求めて、海外からシオニストたちがインドに來訪しており、彼らとの交流もベネ・イスラエルの自己認識に影響を与えている。バグダーディーなどのインド国内の他のユダヤ・コミュニティからの差別を経験していた彼らは、こうした交流を通じて「正統な」ユダヤとしての自負を強めていくことになるのだが、本論文はこの流れをベネ・イスラエル・エリートたち自身の残した記述や、インドを訪問したシオニストたちの著作、当時の新聞・雑誌記事をもとに考察している。

(4) ベネ・イスラエルからみた「国民国家」成立過程

上記の4つの時代区分のうち、この時代区分、すなわち第二次世界大戦から印パ分離独立、イスラエル建国宣言にいたるまでの時代におけるベネ・イスラエルの帰属意識、国家観に関しては、European Conference for South Asian Studies(2019年)、日本南アジア学会全国大会(2022年)で報告したのちに(学会発表リストを参照)その一部を論文として刊行した(「近代インドのベネ・イスラエル知識人とシオニズムーインドのユダヤ・コミュニティからみたパレスチナ」、『ODYSSEUS 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要』第27号、2022年)。ここではレベッカ・ルーベン(Rebecca Reuben, 1889-1957)というベネ・イスラエル出身の女性知識人の生涯を追い、とりわけ1940年代から50年代にかけての彼女とパレスチナ、イスラエルとの関わりや、イスラエル建国宣言、インド・イスラエル間関係についての彼女の見解、それらに表れ

る彼女の帰属意識のあり方に焦点を当てた。

なお、本プロジェクトでは の時代区分、すなわちイスラエル建国宣言以降、とりわけベネ・イスラエルのイスラエル移住が本格化して以降の時代も分析対象に含めていた。2018年、2019年に行ったインドとイスラエルでの現地調査では、現在のインド、イスラエル社会におけるベネ・イスラエル出身者を取り巻く状況や、彼らの自己/他者認識のあり方に関して様々な手がかりを得ることができたが、その後のコロナ禍の影響で、これらの考察を裏付けるための再度の現地調査を行うことができなかった。 の部分については、今後別の機会に改めて取り上げたいと考えている。

(5) ベネ・イスラエル作家の描く「故郷」

本研究ではさらに、ベネ・イスラエルの帰属意識や「故郷」をめぐる言説について、文学作品を通じて検討する試みも行った。この作業は、研究代表者、研究協力者の両名が携わり、役割を分担しながら進めている。研究代表者は本プロジェクト開始以前に、インド西部アフマダーバード在住のベネ・イスラエル出身の女性作家 Esther David 氏 (1945 -) と交流する機会をもち、彼女の文学作品における「故郷」「家」に関する叙述に関心を寄せていた。本プロジェクトの構想期にあたる2016-2017年には、同氏の「家」をめぐる叙述を分析した報告 ('Being a Bene Israel Jewish woman in Ahmedabad: Esther David and her 'home'', European Conference for South Asian Studies, 2016年) や、食に関する記述とアイデンティティについての語りとの連関に焦点を当てた報告 ('Stories of food and search for self: Esther David and the Bene Israel community in postcolonial India', 日本南アジア学会全国大会, 2017年) を行った。プロジェクト開始以降も、研究代表者は同氏との交流を続けながら、文学作品の分析を進め、その成果の一部を(4)で触れた研究発表のなかに組み込んでいる。一方、研究協力者は、Esther David 氏の代表作のひとつである長編小説 *Book of Esther* の内容を日本語でわかりやすくまとめ、解説を加える作業を進めている (小磯千尋「エスター・デイヴィッド『*Book of Esther*』とインドのベネ・イスラエル」、『亜細亜大学国際関係紀要』第31巻2号/第32巻2号、2022年/2023年)。研究代表者、研究協力者は本プロジェクト終了後も、同氏の文学作品の紹介・分析を継続し、何らかのかたちでその成果を発信していくことを検討している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 井坂 理穂	4. 巻 27
2. 論文標題 近代インドのベネ・イスラエル知識人とシオニズム：インドのユダヤ・コミュニティからみたパレスチナ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Odysseus：東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要	6. 最初と最後の頁 19～41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002007353	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 井坂 理穂	4. 巻 26
2. 論文標題 植民地期インドのユダヤ・コミュニティとシオニズム	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Odysseus：東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要	6. 最初と最後の頁 157～174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002003662	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Riho Isaka	4. 巻 11
2. 論文標題 Travelling and Food in Colonial India: Experiences of Japanese Travellers in the Early Twentieth Century	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Journal of South Asian Studies	6. 最初と最後の頁 33-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11384/ijzas.1008	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 井坂理穂
2. 発表標題 近現代インドのユダヤ・コミュニティと「故郷」をめぐる言説
3. 学会等名 日本南アジア学会第35回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井坂理穂
2. 発表標題 M.K.ガーンディーの「語り」
3. 学会等名 東京大学ヒューマニティーズセンター第38回オープンセミナー：語る力が権力を作る？ 歴史からの問いー
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井坂理穂
2. 発表標題 近代インドからみることばと翻訳
3. 学会等名 東京大学ヒューマニティーズセンター第42回オープンセミナー：ことばとことばの間 近代アジアにおけることばをめぐる模索
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井坂理穂
2. 発表標題 植民地期インドのベネ・イスラエルとシオニズム 戦間期を中心に
3. 学会等名 日本南アジア学会第33回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井坂理穂
2. 発表標題 近現代インドにおける身体・宗教・法 断食死をめぐる論争
3. 学会等名 第27回公開シンポジウム 身体 からみる地域 医療・衛生・宗教実践
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Riho Isaka
2. 発表標題 The Bene Israel elite in colonial India and their ideas of belonging: Empire, nationalism, and Zionism, 1910s - 1930s
3. 学会等名 AAS-in-Asia 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Riho Isaka
2. 発表標題 Body, religion, and laws in modern India: Debates on santhara / sallekhana
3. 学会等名 日本南アジア学会第32回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Riho Isaka
2. 発表標題 Life narratives of Bene Israel women and their ideas of belonging in colonial and postcolonial India
3. 学会等名 25th European Conference on South Asian Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	小磯 千尋 (Koiso Chihiro)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------